

---

# ひとつの灯り

彩月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとつの灯り

### 【著者名】

NZマーク

N5233A

### 【作者名】

彩月

### 【あらすじ】

奏は、自分のよく行く場所で、幼なじみの稜平と会う。何気ない会話の中で、奏は自分の中の本当の感情に気がつく。

放課後、いつも行く場所がある。

小さい頃よく遊んだ公園を抜けた先の高台だ。そこでは街全体が見渡せる。

私がそこへたどり着くと、四月の生暖かい湿つたような風が髪をなでた。

私はそこで、陽が落ちるまでの数十分間、一人で過ごす。何をするわけでもない、ただ赤く染まる街を見るだけ。

視界が広くなつたような気がして、それだけで何も考えずにすむ。私は目を閉じ、街の音だけ聞いていた。すると、すぐ後ろから自転車の鈴の音がした。

「奏衣？」

聞き覚えのある声。幼なじみの高城稜平だ。

「・・・稜ちゃん」

「久しぶりじゃん。何してるの、一人で」

「別に何も。ぼうっとしてただけ」

稜ちゃんは自転車から降り、こちらへ近付いた。

「変わつてないな、奏は。お前、昔から一人でこうこう所にぼつつといるのが好きだったよな」

無邪気な笑顔で言つ。途端に、昔私の姉、雪姉と三人で遊んだことを思い出した。

「そこの公園でよく遊んだる。雪と三人でさ。最初は三人で遊んだのに、ふと気がつくと奏が少し離れた所で俺と雪を眺めてたもんな」

「・・・そうだっけ・・・」

確かにそうだった。あんまり楽しそうに雪姉と稜ちゃんが笑つているから、入りづらくて、ただ一人を眺めていた。

「稜ちゃん、高校楽しい？」

ふいに聞いてみたくなった。今、雪姉と稜ちゃんは同じ高校に通っている。稜ちゃんの顔が優しい表情に変わる。

「うん。楽しいよ。奏も来年受験だもんな。お前も俺らの高校に来なよ」

街がだんだん赤色に染まる。

「私は・・・高校に行かないかもしない」

稜ちゃんの顔も夕日に当たつて赤色になる。私は目を細めた。

「高校行かない?どうしたんだよ、奏。何かあつたのか?」

「・・・・」

心配そうに私の顔を覗きこむ。とうとう私は視線を反らしてしまった。

「なんか嫌なことでもあつたのか?雪はなんも言つてなかつたけどな」

「違うよ。そんなんじゃない。ただ私、大勢の人かいとこつて苦手だし。働いたりしたほうが少しほましかなあつて」

稜ちゃんの動きが止まつた。もう春とはいえ、まだ寒い。少し身震いした。

「ホラ、さつき稜ちゃんも言つてたでしょ?私は一人でいるのが好きだったよなつて。ホント、そつなんだよ。私は一人でいるのが性に合つてゐみたいだから」

「馬鹿言うなよ」

稜ちゃんの声が大きくなつた。今度は、私の動きが止まつた。

「そんなんで高校行かないとか言つた。人と関わらないで生きていけるわけないだろ?どこ行つたつて、そんな場所なんかない。どうしたつて人と関わらなきやいけないんだよ」

私の頭の中で、クラスの子たちが浮かんでいた。全て、私のことを馬鹿にして笑つてゐる顔だ。

「・・・だつて嫌だよ。他人と関わりたくない。私のこと、普通じやないつて馬鹿にされるだけだもん。そんな人たちの中にいるぐらいなら、最初から一人でいる方がいいよ」

「奏……クラスの人たちとうまくいくってないのか?」

「…………」

「稜ちゃんにだけは知られたくなかったのに。涙が溢ってきた。

「奏、お前はクラスの奴とか周りの人間が嫌いって思うかもしけないけど、多分、それは違うと思う」

「…………え?」

「奏が一番嫌いなのは、自分なんだよ。大勢の中にいるとさ、一番自分が見えてくるんだよな。奏はそれが嫌なんだ。一人でいたって、そういうことだろ?」

「…………」

さっきまでは、クラスの子たちの顔が浮かんでいたのに、急に思い出したのは、小さい頃の稜ちゃんと雪姉だった。

楽しそうに笑う顔。汗までが太陽の光に反射して眩しい程。近付けば近づく程、距離を感じた。

だから、遠くから眺めていた。

「私は、雪姉と稜ちゃんがうらやましかった。明るくて、目に映るもの全てが楽しいことだって言つてるみたいで。でも、一人の中に入ろうとすればする程、自分の暗さが目につく気がした。だから、一人でいたかったの」

稜ちゃんの顔に、再び優しさがともる。まるで、稜ちゃんが太陽みたいだ。

「俺は奏のこと、好きだよ。でもそれは、一人でいる時の奏じゃなくて、時々俺に見せてくれる笑顔とか、そういうとこ。だから、そういう奏がだんだんいなくなるんじゃないかって、心配だった。他人とぶつかつてはじめて自分が生まれるんだよ。他人と関わらないってことは、自分を殺すってことだ」

私は、自分を殺そうとしてた。他人と関わることを避けて。でも、ちゃんと見てくれる人がいたんだ、私にも。

稜ちゃんは手で自転車を押しあじめた。

私もそれについていく。

あたりは、もうすっかり暗くなっていたけれど、心地よい風が吹いていた。

街の灯りがいつもより輝いて見えた。

(後書き)

初めて投稿してみました。  
拙い文章ですが、何か感じでくれれば嬉しいです(。o^-^o)

何か感じでくれれば嬉しいです(。o^-^o)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5233a/>

---

ひとつの灯り

2010年10月12日22時12分発行